

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 1 LESSON 7 授業例②

K.S. 先生

指導計画表

(全 10 時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ■オリエンテーション ・本単元を貫く課題と終末の活動の見通しをもつ 【単元を貫く課題】 ・ALT の先生に「やってみたい！」と思ってもらえるように、お気に入りのスポーツの魅力を紹介しよう！ ■身近なスポーツ説明
2	<ul style="list-style-type: none"> ■GET Part 1 ・新出文法 can の導入 ・can を使った表現活動 「自分ができることや仲間ができること」 ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
3	<ul style="list-style-type: none"> ■GET Part 2 ・新出文法 can (疑問文・否定文) の導入 ・can を使った表現活動 「友達ができることやできないこと」 ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
4	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Read (p.84) ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・語句・表現の導入 ・「読み取りの窓」をもとにした読み取り ・英語による説明 「車いすバスケットボールのルールについて」 ・本文についての Q&A

時間	学習内容・主な活動
5	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Read (p.85) ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・語句・表現の導入 ・「読み取りの窓」をもとにした読み取り ・英語による説明 ・「京谷和幸選手について」 ・本文についての Q&A
6	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Listen ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・リスニング ・英語による説明 ・「松本さんの補助犬について」
7	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Speak ・オーラル・インタラクティブイントロダクション ・リスニング ・インタビュー活動 ・「無人島に行くパートナーの条件」 ・自分や友達のできること紹介
8	<ul style="list-style-type: none"> ■スピーチ原稿作り ・マッピング ・スピーチ原稿作り ・「自分のお気に入りのスポーツやスポーツ選手やルールなど」 ・表現の交流・再構築
9	<ul style="list-style-type: none"> ■スピーチ練習 ・練習 (個人・ペア・グループ) ・スピーチ交流 ・表現の交流・再構築
10	<ul style="list-style-type: none"> ■スピーチ発表 ・全体でのスピーチ交流 ・ベストスピーカー選出

実践例

1. LESSON 7 で付けたい力

本単元では、助動詞 can の肯定文、疑問文、否定文の表現を身に付け、活用しながら、「お気に入りのスポーツを紹介しよう」という題材でのスピーチ活動を通して、自分の伝えたいことを整理して聞き手に伝えられる生徒を育成したいと考えました。そこで、本単元の指導事項を、「話すこと」(オ)「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」としました。そして、単元を貫く課題を「ALTの先生に『やってみたい』と思ってもらえるように、お気に入りのスポーツを紹介しよう!」と設定し、言語材料を活用するゴールの活動に必然性をもたせました。単にスポーツの概要のみを説明するのではなく、スポーツのルールやそのスポーツ界で有名な選手の魅力、自分の体験などをふまえた感想も付け加えることで、事実のみを伝えるのではなく、自分の感想も含めて、豊かに表現する力を付けることをねらい、指導を進めてきました。

2. LESSON 7 の導入

単元の導入時では、いかに生徒が「楽しそうだな。やってみたい!」という意欲と、この単元で何を学んでいけば活動ができそうかという見通しをもって学習に取り組めるかが大切になってくると考えています。だから、単元の最初に教師の好きなスポーツを写真や実物を用いてモデルを示し、どのような説明だったらALTが「やってみたい!」と思えるかというイメージをもたせてから単元の学習を進めました。私の好きなスポーツがバドミントンであるため、バドミントンのラケットやシャトルを見せながら、バドミントンのルールを含めた説明やバドミントンをしていて楽しいと思った瞬間、また私が好きな選手の写真を用いながらバドミントンの楽しさやすごさを簡単な英語で伝えました。そうすることで、生徒は、説明する時にはどんなスポーツなのかということだけでなく、ルールや選手の紹介、実際にやってみた感想を入れて話す魅力が伝わることや、イメージできるような物や写真な

どがあると伝わりやすいということをおおまかにつかむことができました。そしてそれが、この単元の学習をすすめる時に、どのようにルールや選手の紹介をしていったらよいだろうかと考えながら取り組むことにつながりました。

また、本単元で扱われている車いすバスケットボールがどのようなものか知らない生徒が多いことが分かりました。そのため、県内で行われたスポーツ大会での車いすバスケットボールの試合の様子や、この単元のモデルになっている京谷和幸選手を取り上げた映画「パラレル」を見せたり、「リアル」という車いすバスケットボールを取り上げた漫画を生徒に紹介したりしました。生徒たちは、実際の映像やストーリーに触れることで、題材についての関心をもつことができ、意欲的に単元の学習を行うことができました。

3. LESSON 7 の GET の進め方

本単元では、言語材料 can を活用しながらスポーツ紹介を行っていくのですが、紹介する際にどうしても3人称単数現在形を活用することが必要になってきます。そのため、帯活動において、Guess Who Game (教師が出した人物の説明を英語で行い、推測する活動)をペアで行い、3人称単数現在形の定着を図ってきました。毎時間、帯活動で練習することで、生徒たちは少しずつ正確に3人称単数現在形を使って活動できるようになりました。

その後、ALTと会話をしながら、新出の言語材料 can を導入し、本時は何に着眼して学習するのかという見通しをもって学習に入ることができるようにしました。自分や仲間の「できる」ことや「できない」ことについて、can を使って対話活動を行いました。その際には、相手が言ったことをリピートしたり反応したりするといった、仲間同士のかかわりを大切にしました。

言語材料の定着を図った後、教科書題材を扱った活動に入ります。教科書の絵を指し示し、生徒とインタラクティブに題材の導入を行い、単語練習、本文理解の学習へとつなげます。

単元の終末の活動につなげるためには、教科書内容を理解するだけでは不十分で、言語材料をインプットすることが大切になってくると考えました。そこで大切にしてきたことは、音読練習です。コーラスリーディングを行った後、個人練習、ペア練習(交互読み・インタラクティブリーディング・シャドーイング)を行います。その後、教科書の絵を使いながら、分かったことを英語で説明する活動(リテリング)を行い、定着を図りました。生徒たちは、何度も音読することで、教科書内容を理解するだけでなく、言語材料 can を定着させることができ、それが単元の終末の活動の際に生かされました。

4. LESSON 7 の USE Read の進め方

生徒たちにとって車いすバスケットボールが身近なスポーツでなかったため、USE Read の学習に入る前に、車いすバスケットボール用の車いすを見せてイメージを湧かせました。初めて車いすバスケットボール専用の車いすに乗った生徒の感想は下記のとおりです。

実際にバスケットボール専用の車いすに乗って見たら、とても動きにくくてまっすぐ進めませんでした。でも映像にあるようにドリブルしたり、シュートしたりできるなんてすごいいいと思いました。もっと車いすバスケットボールについて知りたいと思いました。

学習に入る前に、実際の車いすに乗ってみることで、題材をより身近なものに感じられるのと同時に、疑問を湧かせることで、意欲をもって読み取りの学習に入ることができました。

また、1年生で USE Read が扱われるのは、この LESSON 7 からであるため、生徒たちは、まとまった英文を読み取る際につまずくであろうと考えました。そこで英文を読み取る際には、次の3つの場面での指導が必要であると考えました。

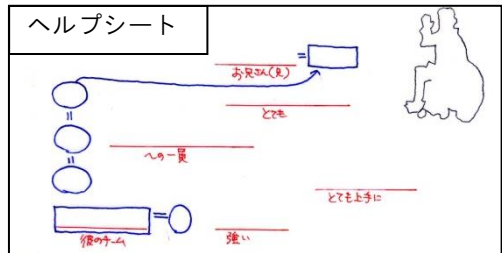
【英文を読み取る際に指導を入れる場面と手だて】

- ①大まかな内容をつかむこと(《課題提示》の段階)
→「読み取りの窓」の提示、教師の個別指導

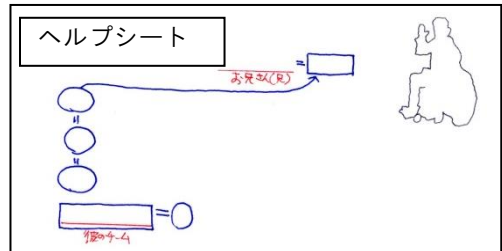
- ②文の構成を理解すること(《課題追究》の段階)
→辞書の使用、文法の説明、教師の個別指導
スモールグループ内による読解
- ③分かったことを英語で説明すること(《確認》の段階)
→ペアによる相互評価活動

課題提示の段階で、大まかな内容をつかむことができるように、教師から英語による「読み取りの窓」を与えました。そうすることで、着目する英文が分かり、課題追求を進めることができました。しかしこの段階で、英文が理解できず読み取ることができなくて困っている生徒もいました。困っている生徒に声をかけたところ、「単語が難しいし、代名詞ばかりでよく分からない。」という実態が分かりました。また、同じように困っている生徒に声をかけたところ、「単語の意味は分かるが、代名詞が何を指しているのか分からない。」という実態が分かってきました。この2人に見られるように、同じ「分からない」でも、つまずいているところが違うことがわかります。そのため、次のような教科書本文に合わせると理解を助けることができるヘルプシートを2種類準備し、生徒自らが必要なシートを選択して、課題解決に向かえるようにしました。

【単語の意味と代名詞の理解を助けるシート】



【代名詞の理解を助けるシート】



その後、2人の生徒は「読み取りの窓」に書かれた英文の答えを書くことができました。

一方で、読み取りに自信がある生徒には、「どこに着目して答えを導き出したか根拠を明らかにして説明してみよう」と声かけをしました。そうすることで、課題追求の段階で、どこに着目したのかという根拠を示しながら説明することにつながりました。

このように個別へのアプローチもしながら課題追究を終わらせた後、音読練習を充実させ、p.49では、「車いすバスケットボールのルール」、p.50では、「京谷和幸福選手」についてどんなことが分かったか、教科書の絵や写真、そして実際の車いすを用いながら説明する活動（リテリング）を行い、教科書内容を理解することができたかどうかを確認しました。その際、単元の終末の活動につながるように、学習して思ったことや感じたことを伝えるようにしました。

5. LESSON 7 のスピーチ活動の進め方

教科書についての学習を終えてから、単元の終末の活動である「お気に入りのスポーツ紹介」の活動に入りました。どんなことが紹介できるかマッピングを行い、教科書表現を参考にしながら、スピーチ原稿を作りました。スピーチの内容に含めたものは、下記の3点です。

- ①お気に入りのスポーツの概要、ルール
- ②お気に入りのスポーツ選手のすごいところ
- ③実際にやってみた感想、勧めたいポイント

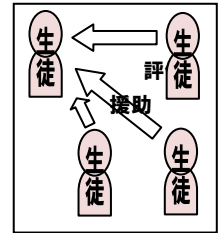
個人で原稿を作成した後、仲間との交流を通して表現の学び合いを行いました。ペアでスピーチを交流した後に、お互いのスピーチ原稿を交換し合い、その中で、「真似してみたい」と思った表現に線を引いたり、「もっと知りたい」と思ったことを質問し合ったりしました。この学び合いによって、さらにどんな表現を加えたらいいのか自覚できるようにし、仲間の表現を参考に、自分の表現を高めることができましたようにしました。生徒は、学び合いを経て原稿の再構築を行った感想は下記の通りです。

・サッカーの紹介で、Players can't use their hands,

but a goal keeper can use his or her hands. というルールがよく分かった。僕はバスケットボールについて説明するので、handsをlegsに変えて使おう。

・イチローの紹介の中の、He can catch any balls. という表現がいいと思った。私は卓球の福原愛を紹介するので、She can return any balls. という文を加えよう。

生徒たちは、学び合いの後、自分の原稿を再構築し、もう一度スピーチの練習をしました。学習の最後に、どれだけ表現が深まったかをグループで確認し合うためです。グループでの学習活動の確かめの場では、右のような4人1組をつくり、1人がお気に入りのスポーツの紹介をし、残りの3人は、その説明を聞いて本時の評価規準が達成されているか確認したり、十分に話せない仲間には、説明を聞いている生徒がその場で援助したりして話せるようにしていききました。



仲間との学び合いを通して、お気に入りのスポーツの魅力が伝えられるかどうかを追究していき、スピーチ発表へと進めていきます。生徒たちは、「自分一人では、これが一番いい!」と思っていた内容のスピーチでも、仲間と学ぶ合うことによって、「こんな表現の仕方もあるのか、この表現を付け加えることでインパクトを与えることができた!」など、より詳しく伝えられたことに充実感と喜びを得て学習を終えることができました。

6. LESSON 7 の実践を振り返って

生徒にとって馴染みの少ない車いすバスケットボールが題材として扱われているため、生徒がいかにイメージしながら学習できるかが大切だと考えました。そのために、映像や絵、実物を見せたりすることで、生徒の理解を深めることができたり、「もっと知りたい」という学習意欲を高めることにつながったりすることができました。生徒の関心や意欲を高めるために、教師が教材を多様に準備することの大切さを実感しました。

また、単元のゴールの活動を設定することにより、1単位時間に何を指導し、身に付けさせればよいのかをはっきりさせた上で指導に当たることができました。生徒もこの学習が単元のゴールの活動に生きてくるから学習しているのだという思いで学習を進めることができ、単元を通して意欲的に学習に取り組むことができました。教科書題材を用いて学習している際にも、自分の考えや気持ちを伝えることを大切にすることによって、生徒たちは事実のみではなく自分の気持ちをプラスして伝えることができるようになってきました。

これからも生徒の実態をとらえ、生徒に合った指導方法を研究していきながら、生徒が「自分の英語が伝わってよかった!」「もっと英語で表現してみたい!」など、英語で表現することに喜びを見出し、意欲をもって英語を学ぶことができる授業作りをしていきたいと思えます。